



16 琉球中城之東門

16 琉球中城之東門 山本芳翠
五九・〇×四四・六

17 琉球東城旧跡之眺望 山本芳翠
六一・五×四六・一

18 那覇港之景 山本芳翠
四三・二×五七・五

19 桜島農夫之踊 山本芳翠
四三・四×五八・八

明治二十一年(二八八八) 油彩・カンヴァス

山本芳翠(一八五〇〜一九〇六)は、美濃国明知(現在の岐阜県恵那市明智町)に生まれた。明治元年、十八歳の時に絵画修行を志して中国へ渡るため横浜へ出たところ、五姓田芳柳の作品に出会って感銘を受け、留学を取りやめて弟子入りをする。そして五姓田義松やワグマンとも交流し、洋画技法を身につけていった。明治十一年にはフランス・パリへ渡り、同地の国立美術学校の教授であったジャン・レオン・ジェロームに師事している。

芳翠は、フランスから帰国して数ヶ月と経たない明治二十年十一月に、内閣総理大臣伊藤博文らの九州・沖縄地方の巡視旅行に同行して渡航したと考えられており、その後そこで目にした各地の風景を二十枚の絵に描き、皇室に納めたことが知られる。そして、その内の八枚が当庁に現存している。芳翠と関わりの深かった長尾建吉の手によると思われる額縁(35頁の参考図版参照)には、それぞれ作品名を記したプレートが画面中央下の部分に打ち付けられており、現在もその題名で呼称しているが、かねてより描かれた場所と作品名が一致しないことが指摘されている(高階絵里加『異界の海 芳翠・清輝・天心における西洋』美術の図書三好企画、平成十二年)。高階氏の見解をもとにすると、「琉球中城之東門」(作品番号16)は、「中城」とあるが描かれ



17 琉球東城旧跡之眺望

ているのは中山王尚泰久の時代（一四五四～一六〇〇年）に築かれた中城ではなく、首里城の美福門である。この門を仰ぎみる角度で描き、そこへ続く階段を鮮やかな紅型の着物姿の女性が登っているのが見える。作品番号17は「琉球東城旧跡之眺望」の名が付けられているが、沖縄に東城という名称の旧跡はなく、これは首里城の東側に位置する中城の城跡と考えられる。「那覇港之景」（作品番号18）では、西の海と言われた那覇の港が描かれ、背景には十六世紀に建造された三重城が見える。他にも、沖縄を舞台にした作品には、「宗元寺舜天王之廟」と「ハブ鳥ト戦フ図」があり、後者にのみ「H. Yamamoto」のサインが入れられている。

「桜島農夫之踊」（作品番号19）は、沖縄に渡る前に訪れたと思われる鹿児島活火山桜島を題材にしたものである。郷土民踊を踊る桜島の農夫たちが描かれており、画面手前の大きな岩は桜島特有の溶岩石と思われる。これらの作品は、芳翠が旅行より帰ってきてから、現地で写生したスケッチや記録写真をもとに描いたのだろうが、人物の配置など画面効果を考えて意図的に描かれたと思われる部分がある。言い換えればこれらの連作画は、芳翠独自の視点によって切り取られた風景であり、単なる記録という側面にはとどまらない絵画としての魅力が溢れているのである。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に¹出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近代の洋画家、創作の眼差し

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 52

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十二年十月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections